ラクシュミー女神：富と幸福と豊穣の女神。家庭神としても広く親しまれています。全国的規模で祝われるインドのお祭り、ディーワーリー（dīvārī　原語 div√ 「天。光耀。光輝」。日本の正月のように、インド最大の祝い祭）。特に叙事詩『ラーマーヤナ』の舞台の北インドは密接にこの祭が賑います。

サンスクリットの原語が示すように、光の祭として有名です。夜には各戸に明りが灯され素焼きの小さなランプ皿があちらこちらに置かれます。これは何よりラクシュミーを家に招き入れるためです。扉は開け放たれ、戸口には灯と菓子が供えられ、家の中も暗い場所ができないようにくまなく照らされるのです。地方によっては、さらに念を入れて入口の前に吉祥の紋様を描き（右　民芸「**アルポナ**」）ラクシュミーの小さな足跡も描いて、それを家の中に導き入れたりします。

大衆宗教画にラクシュミーを真中に、左右にガネーシャとサラスヴァティーを配した「**ディーワーリー・ラクシュミー**」と呼ばれる画像がありますが、この富と幸運と知恵の三位一体には誰もが家に来てもらいたいと思うところでしょう。教室にいつも飾っていますね！

下は今日よく目にする「**ガジャ・ラクシュミー**」画像。水に浮かぶ蓮華の上に立つのは、**乳海攪拌**（天地創造のヴィシュヌ神話）のとき

（3）

泡立つ海の中から生まれたことからでしょう。通常左手に蓮の花を持ち、下に向けた右掌からは富の非常に即物的な表現として金貨がこぼれ落ち、背後から二頭の象（ガジャ）が祝福の水をかけています。たいへん古い構図で、そんなに古くからコインが象徴的に描かれるとは…。

ラクシュミーの美しさに神も悪魔も感嘆し、贈りものをして気を惹きます。結局ヴィシュヌ神を夫として選び、妻となってからは、夫が化身（アヴァターラ）となって地上に降りるときはラクシュミーも姿を変えてそれに従うとされ、ヴィシュヌがラーマのときはシーターとなり、クリシュナとして生まれるときはルクミニーになるわけです。ブッダ（仏陀）の妻はヤショーダナラ（耶輸陀羅）です。

ラクシュミーは豊穣の女神ですから、しばしば**大地の女神**プリティヴィーとも同一視されます。北部民芸アルポナ(上)の古典画では、地球は大地女神(プリティヴィー)から生えた大輪の蓮で表され、中には地球の相反する二つの性(＝男女)が描かれます。南部では**穀物の女神**とも考えられています。このことはラクシュミーが最も古い**地母神**の姿に戻ったことを示しているのです。そして周囲は、アシュタダルマ・パドマ(八枚花弁蓮華)が配され、宇宙の星々として描かれるのです。

仏教に入って吉祥天と漢訳され日本に渡来。吉祥天は毘沙門天の妃です。毘沙門天はインドでは財神クベーラです。そのため、吉祥天は平安時代から富や幸運の女神でしたが、近世では弁財天にその性格と信仰人気はもっていかれてしまいました。　（4）